

当院は2005年4月1日より総合周産期母子医療センターに指定されています。岡山県では総合周産期医療センターとして倉敷中央病院と当院の2施設が指定され、地域周産期母子医

療センターに指定されている岡山大学病院、岡山赤十字病院、川崎医科大学附属病院、津山中央病院の4施設と協力して、県内のハイリスク妊娠・分娩をカバーしています。

総合周産期母子医療センター

総合周産期母子医療センターは、産科(母体・胎児部門)および新生児科・小児外科(新生児部門)を中心として構成され、その他の専門科の協力を得て、母体や胎児に合併症を持つ妊婦さんを妊娠中から産後まで、赤ちゃんを胎児期から新生児期まで一貫してケアしています。対象となる患者さんは、妊婦・産褥婦、胎児・新生児ということになりますが、センター内では医師、助産師、看護師、臨床心理士を中心に他のコメディカルの協力も得ながら、患者さんの治療にあたらせて頂くだけでなく、母子を中心としたご家族ごとサポートできるようチーム医療を実践しています。

近年は日本での分娩数は減少傾向にあり、2019年は90万件を下回り、当院も2008年の730件をピークに減少傾向を認め年間の分娩総数は500件ですが、他施設からの母体搬送件数は年間120件前後で推移し変化していません。当院に通院される妊産婦さんの診療や保健指導を行う他、岡山県内全域からの産科救急母体搬送の受入れを24時間体制で対応し、リスクの高い妊娠に対する周産期管理を行っています。また、当

科では、妊娠中からの母乳育児のサポートや、母子同室に力を入れており、合併症のない健康な妊婦さん、里帰り出産をご希望される方も積極的に受入れています。ローリスク妊娠に加えて母児に合併症のあるさまざまなハイリスク妊娠を取り扱っており、1年間の早産例は約110件、多胎妊娠の分娩は約40件、胎児疾患の分娩例は約20件です。ハイリスク妊娠に対しても関係各科と協力して積極的に対応しています。

専門外来として、毎週火・水曜午後「多胎外来」を開設し、多胎妊娠に伴う母児の合併症を最小限にするための管理を行っています。また、「出生前診断」は毎週木曜日午前、超音波検査、染色体検査、NIPTなどに関する出生前診断カウンセリングを行っています。「妊娠と薬の外来」は「妊娠と薬情報センター」(国立成育医療センター内)と連携して、妊娠・授乳中の薬剤使用に関する相談を随時受け付け、当院の産科および新生児科医師と薬剤師が対応に当たっています。

赤ちゃんにやさしい病院(BFH:Baby Friendly Hospital)

旧国立病院時代、1991年にWHOユニセフより先進国で初めて「赤ちゃんにやさしい病院」に認定されました。私たちの病院では、母乳育児を中心として母子の幸せ、家族の幸せのために様々な取り組みをしています。

●分娩直後の早期接触と母子同室

生まれて間もない赤ちゃんとお母さんにとって肌と肌の触れ合いはとても大切な時間です。出生直後の赤ちゃんは状態が安定しないこともあるので、呼吸状態や体温に注意し、スタッフが安全に十分に配慮した上で行っています。

双胎妊娠への取り組み

双胎妊娠は、早産や妊娠高血圧症、さらに一絨毛膜二羊膜双胎(MD双胎)は、双胎間輸血症候群(TTTS)などを発症する可能性があるハイリスク妊娠です。当科では年間40件の双胎妊娠の管理をおこなっています。妊娠35週未満の早産で分娩となる双胎の割合は、全国平均よりは低いですが、約14%おられ、NICU(新生児集中治療室)の病床圧迫などの問題が出てきます。また、TTTSは発症した場合、両方の児の予後が悪くなる可能性が高く、早期に発症した場合は胎児鏡下手術を行わなければならない疾患ですが、突然発症するケースもあり発症の予測が非常に困難です。

そのため、双胎妊娠の管理はきめ細やかな母体と胎児の観察が必要で、また妊婦さん自身がハイリスク妊娠であることの認識をさらに高めていただく目的で、多胎専門外来を開設しています。多胎外来では切迫早産、妊娠高血圧症、さらにTTTSなどのリスクがないか等を細かく確認し、妊婦さんには多胎妊娠に関するパンフレットをお読みいただき、気になる症状が診察時以外でもないか注意していただくように指導させていただいています。今後、さらに早産率低下やTTTSの早期発見などに繋がればと考えています。分娩方法においても、妊婦さんのご希望を確認した上で、当科で設定した適応

を満たせば経膈分娩も積極的に行っています。MD 双胎においては、TTTS 発症の原因となる胎盤吻合血管の同定を行うため、出産後の胎盤血管に色素を注入し吻合血管の詳細な観

察を行っています。

主な対象疾患

産科的疾患

多胎・前置胎盤・常位胎盤早期剥離・妊娠高血圧症候群・子宮頸管無力症・帝王切開後の経膈分娩・その他ハイリスク妊娠(早産既往など)

母体合併症妊娠

各専門内科と協力し以下のような合併症妊娠の管理を行っています。

糖尿病・妊娠糖尿病・高血圧・バセドウ病・橋本病・膠原病・喘息・潰瘍性大腸炎・心疾患・特発性血小板減少性紫斑病・てんかんなど

その他母体合併症に対する検査・治療もご相談ください。

胎児・新生児管理を要する疾患

切迫流産・切迫早産・前期破水・多胎・血液型不適合妊娠・子宮内胎児発育不全・羊水過多など

胎児疾患(循環器・小児外科・口腔外科・脳外科の管理を要する)

胎児不整脈・消化管閉鎖・横隔膜ヘルニア・先天性心疾患・臍帯ヘルニア・腫瘍・口唇口蓋裂・水頭症・髄膜瘤・胎児水腫・消化器系疾患・腹部疾患・泌尿器系疾患など

主な検査と治療

検査

胎児超音波検査・胎児心エコー・胎児MRI・CT・羊水穿刺・臍帯穿刺による胎児採血

治療

胎児胸腹水の穿刺・胎児輸血・胎児不整脈に対する抗不整脈剤投与・緊急頸管縫縮術

セカンドオピニオン

ハイリスク妊娠、多胎、胎児異常などのセカンドオピニオンにも対応しております。

婦人科疾患

婦人科は、非妊娠期の女性の診療を担当しており、「女性骨盤外科」と「女性内科」の2つの役割を持った診療科です。「女性骨盤外科」として代表的な疾患である子宮筋腫、子宮腺筋症、卵巣嚢腫等の開腹手術による治療はもとより、卵巣嚢腫や子宮内膜症、子宮外妊娠に対する腹腔鏡、子宮粘膜下筋腫、子宮内膜ポリープに対する子宮鏡手術、子宮頸部上皮内病変、子宮脱に対する腔式手術を行っております。なお前癌病変、早期癌の治療は行っておりますが、進行癌につきましては、原則として近隣の専門病院を紹介しております。また、「女性内科」として婦人科で診療する疾患は多岐にわたります。月経異常や更年期の体調不良、性感染症など、人には相談しにくい症状で受診される患者さんは大変多く、意を決して受診された患者さんに少しでも安心して診察を受けていただけるよう診療にあたることを心掛けております。思春期の女性から閉経後のご婦人まで、特に月経に関するお悩みをお持ちでしたらお気軽に婦人科へお越し下さい。

■ 婦人科医長 政廣 聡子



多田 克彦(産科医長)	塚原 紗耶(産科医師)
熊澤 一真(産科医長)	吉田 瑞穂(産科医師)
政廣 聡子(婦人科医長)	大岡 尚実(産科医師)
立石 洋子(産科医師)	相本 法慧(レジデント)
沖本 直輝(産科医師)	中村 一仁(専攻医)